

門 へ 13
部 1716
卷 2



序

五
卷
大
學
書
院
藏



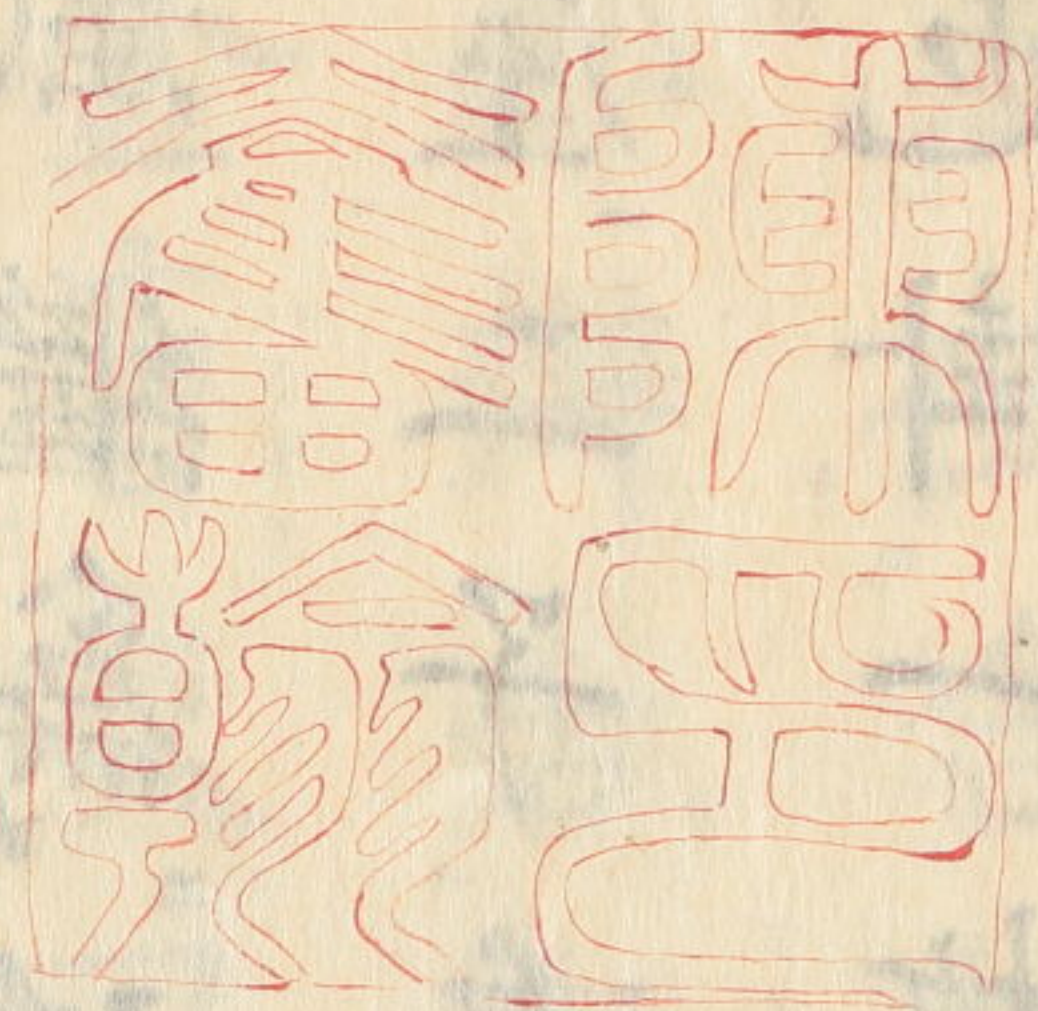
饗庭藏
書之印

風來山人登萬國之東側
觀娑婆大劇場有小舞臺
之志於是紅毛千里鏡
觀冥途樂屋仰天堂俯地

獄_{クハセ} 啖_ニ 林_ニ 香_ニ 於_ニ 閻_ニ 魔_ニ 被_ニ 擯_ニ 鼻_ニ
于_ニ 地_ニ 藏_ニ 倒_ニ 舍_ニ 利_ニ 弗_ニ 智_ニ 囊_ニ 振_ニ
富_ニ 樓_ニ 那_ニ 辯_ニ 舌_ニ 三_ニ 摩_ニ 佛_ニ 面_ニ 始_ニ
知_ニ 黃_ニ 金_ニ 膚_ニ 嘆_ニ 曰_ニ 地_ニ 獄_ニ 天_ニ 堂_ニ
金_ニ 次_ニ 第_ニ 矣_ニ 退_ニ 著_ニ 一_ニ 書_ニ 寓_ニ 言_ニ

八_ヤ 重_エ 桐_ニ 間_ニ 聞_ニ 柏_ニ 車_ニ 薪_ニ 水_ニ 御_ニ
無_ム 常_ニ 風_ニ 繼_ニ 爲_ニ 此_ニ 編_ニ 以_ニ 傳_ニ 諸_ニ
借_ニ 本_ニ 屋_ニ 二_ニ 子_ニ 追_ニ 善_ニ 莫_ニ 大_ニ 焉_ニ
此_ニ 編_ニ 也_ニ 掛_ニ 一_ニ 枚_ニ 看_ニ 版_ニ 而_ニ 行_ニ
於_ニ 三_ニ 箇_ニ 津_ニ 矣_ニ 明_ニ 和_ニ 戊_ニ 子_ニ 秋_ニ

寐惚先生陳奮翰撰



自序

味噌味上るといふ自惚といふは京都の俗言あり。謹てその言法意を考らん。口豆がかしこく話の塩よとい出せるるり記あり。されはさるも之れも此味噌を海へも好し。唐の親父は天徳を予に生ぜりと理居身し玉味をよめば。天竺の謠つゝ唯我獨尊と政ぐらの

そのワケを知らぬ人よ。味増を教へたる
 灸のどくを煮ると少みるらんと言腹の
 鼻槽挺のどく天狗出立の味増しと敬白
 明和五年子れ教へ世柳の衣は奥巾條懸。
 風来山人切幕よと皆と声掛へ世上の作者の
 鼻といへり

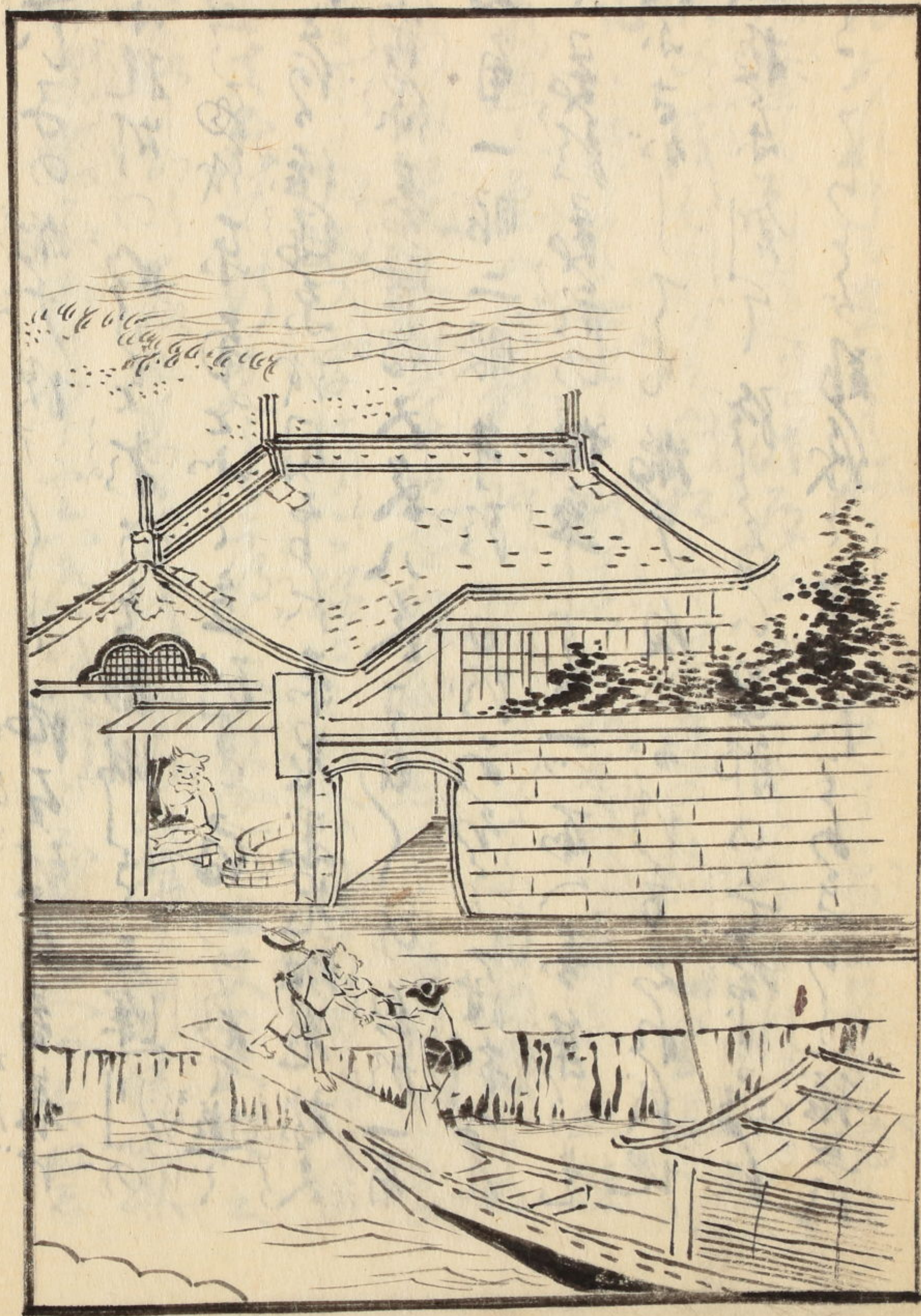


花いん方とあり車轂學人肩摩弘誓の祈
 宿川屋に招け此堂の遠府無通小遮也
 乃菩薩のめりやうか楓紅雲友かおのしきとりし
 呵美の鬼の侍従を日る一の歌方火の車とめぐ
 らし蓮花の大屋店賃を債は脱衣の老婆
 幼化をせつて官や現立をつんて唱古来耳を
 ころ明福をえり法度清とあひゆ政の世の
 中るね三途川のを干沼はあふ下の古をを
 築半白波を平地するは因龜出を
 しろくはくほく末代へあるまをさす

芥子味香鼻の穴とわけめり、海門屋は出
し料理あかん、の笋子、石女、焼くをわてが
双葉の草根より極楽の收どをえりて死す
此著類二達、の川、鶴、八字、地獄の煮凍り、西
の河原の地、新、焼、ぬ、身、能、を、し、折、の、肉、うら
の、人、種、集、是、を、此、代、の、名、物、と、詞、の、信、不、後
お、し、て、幸、以、信、世、に、甘、き、酸、も、苦、を、限、り、ま
得、ぬ、に、終、人、夢、も、浪、の、七、る、の、こ、し、て、文、行、者
半、の、そ、し、く、風、の、草、も、お、の、つ、く、飛、眠、を、そ
ゆ、の、草、の、支、か、ら、う、あ、る、雲、海、く、る、か、り、あ、ま、立、て

根無草後編一之巻

偽り乃るまき世ありき、いりむかり人の云の紫
姑、か、は、し、さ、お、卵、の、方、に、偈、妓、小、寄、る、ま、の、こ
お、だ、佛、法、に、方、便、あ、る、軍、法、に、斗、第、あ、り、信、世
に、追、從、怪、智、あ、る、糸、音、を、産、あ、り、か、ん、し、き、あ、り
虚、を、あ、ま、り、て、是、の、あ、り、偽、あ、る、ま、く、あ、り、た、ま、を、と
い、い、あ、ん、と、ん、と、い、い、文、を、と、い、い、息、を、と、い、い、と
尔、於、美、の、遠、ひ、あ、り、て、は、げ、る、あ、ハ、引、く、偽、を、流
で、丸、く、世、の、中、に、只、偽、あ、る、ぬ、の、連、産、れ、る、者、の
死、す、と、い、て、小、洲、の、子、年、蟄、極、の、夕、也、を、短、き



改の敷く角目立とは是も多し地獄の果で
とまひ智恵少く社長戸頭と云く鬼を
川面ふく正中ふ居並にぬく毎日丁々の
いひやうい若く遠く地獄極楽もん年
の大不系乳日ふま死てるあの人少く
く鬼鬼斗てまれば日この喰度一
米来て来る粥喰くもつりぬぬあはれで
只の序あぐり中く鬼佛を因ふ忘る百味の
食かきくわくぬくままお對の内境るを
大さふらく一蓮たぐりまてかかアガ

泣く如佛いり格別魔がたひりくお母合の
蓮花でいりぐもぬませぬ道徳成らげ
もか層の方と刺もか指果あされてりま
せし然ふや菩薩其の箇の垂り天人を約
りるたりま之のたぬ入ぬ又地獄の責は是れ
原言くもむ存存を年以結む石ぬまの品中
端魔念のそ分列控垂くハ二千世界り暗
害く成事くや十五念のそらめん指ふ
川てこり地獄の強劫毎り毎取存ても
まぶお行方志くくねくきいん思ひる

又々西の幌のまつらぬる髪の曲を
痛くもそんぞぬ執念ど白鬼ハよこれめん
えま鬼ハ弱からや地のなき信留信留鬼不
忍後そつる教つさめて已らハとんと吾
込ぬまの端々白の身代ハあらハいんよ
まのいでいから借食らまら申ちつとぬ末を
まららほの取らそつる物とやこつとあふ
つらつらのがあつる器の振るれどひまは
え代めの障か利はけ付やあふ善悪道
黄令の膚もいままの出入令同を信留

後令でるを合せ極楽一毎日の仕事も
食理つめて仕掛でまら申下振らつて海を
まのまの上でまぶらまらめあの中へあ
とら六尺舞う新舞のあ四段を入らせま
地獄の輪止てまあれつて二百五の富を
世高生道でる市をら先細の心を一丁目
柳系くまらんで二方ハ防れま端々白
味をすまらつてあまらんと舌込ぬまの
茶粥の後の減まらら上り理居らま
がれ鬼仲間でも口を利殺鬼とら通ら者

神の御知と清らなる水虎が備りて侍は
身路考が安す一に心も付存の外の不
定事一を大なるあきら果定と法の方破
は石虎を取りしと種子包まは白状はれと水
虎と心喰味有りたる己らも是を所持是
の気味悪く水白濁しやれ依く混入するは
ようわ川を以て依りての事一山附りて神り候
これ漢子も志者も何とかがざり候と為
といふらん一清願架の後お掛ての位候
のれぬ水も是候して路考が候ふ大事を忘れ

我れハ辛細く一と女形を名取り不連事あり
と者の候りやゆ物も物主も思ふせり此三千
世界を司りてちまを茶ふ一ありて終るは
くま奴と白水虎と蹴教一ありては安
中におもひ候ふれもいふや死なれ
ゆふがよい候ふ魂ゆめは不迷ひ人のあは
を候知ふ男をこし人切のる麻を名取り
け水虎の心魂の障礙とる候とあり
それより年分きゆへも端を名取り候
路考をこれより定業れり候と大玉の



心感^{こんかん}た^たでも^{でも}る^るか^かる^る 叶^かぬ^ぬ故^ゆに^に 安^{やす}閑^{かん}一^{いつ}の^の事^{こと}
ん^んと^とし^し法^{ほふ}て^ての^の亡^な命^{めい}を^をん^んと^と治^ち終^{しゆう}の^の世^よを^をひ^ひ振^び
ら^ら茶^{ちや}色^{しき}の^の鬼^{おに}が^が馬^ま小^{せう}宗^{しゆう}て^てお^おれ^れも^も沙^さ月^{げつ}小^{せう}振^び書^{しよ}
ま^まれ^れ三^{さん}年^{ねん}と^と今^{いま}年^{ねん}の^の堺^{さかい}町^{ちゆう}の^の秋^{あき}の^のた^たく^くま^まれ
後^ごも^もい^いや^やと^と編^{へん}の^の具^ぐと^とあ^あく^く物^{もの}骨^{ほね}て^て目^めを^を治^ちす^す
路^ろ考^{かう}ふ^ふん^んと^とれ^れ一^{いつ}具^ぐ質^{しつ}の^の流^{りゆう}後^ご和^わ鬼^{おに}白^{はく}鬼^{おに}黒^{くわく}鬼^{おに}の
と^と考^{かう}す^す定^{ぢやう}匠^{しゆう}の^の仲^{ちゆう}ま^まを^をと^とつ^つき^きお^おれ^れ一^{いつ}人^{にん}の^の後^ご
考^{かう}茶^{ちや}鬼^{おに}こ^こん^んと^と虎^この^の皮^{かわ}の^の猪^ぶ鼻^び禪^{ぜん}と^と金^{きん}線^{せん}
て^てい^いひ^ひ縁^{えん}縁^{えん}せ^せと^とい^いお^おも^も首^{くび}と^とけ^け濱^{はま}村^{むら}屋^やを^を
二^にヶ^ヶ津^つの^の希^き者^{しや}者^{しや}鼻^びの^の高^{たか}い^い天^{てん}狗^こ仲^{ちゆう}後^ご鞠^{きよく}る^る山

のを^{のを}希^き坊^{ぼう}希^き岩^い山^{さん}の^の治^ち希^き坊^{ぼう}湯^{とう}の^の心^{こころ}め^め方^{かた}る^る坊^{ぼう}羽^う
黒^{くわく}山^{さん}の^の山^{さん}羽^う坊^{ぼう}と^と始^{はじめ}と^と一^{いつ}具^ぐ質^{しつ}の^の流^{りゆう}後^ご和^わ鬼^{おに}黒^{くわく}鬼^{おに}の
下^か町^{ちゆう}ハ^ハい^いか^かふ^ふな^なが^がけ^け那^な夷^い松^{しょう}茶^{ちや}の^の果^{くわい}ま^まと^とも
路^ろ考^{かう}を^を引^ひぬ^ぬ者^{しや}な^なり^りぬ^ぬと^と旦^{たん}那^なの^の物^{もの}と^とも^も安^{やす}閑^{かん}を^をひ^ひ
と^とい^いひ^ひ評^{へう}後^ご又^{また}社^{しゃ}長^{ちやう}の^のい^いら^らち^ち呻^うか^かか^かつ^つて^て女^{にょ}体^{たい}と^と
あ^あん^んま^まう^うた^たん^んと^と吾^ご色^{しき}色^{しき}一^{いつ}息^{いき}を^をひ^ひく^くえ^えよ^よと^とも^もと^と
鳩^{かひ}の^の山^{さん}ぬ^ぬえ^えふ^ふサ^サ一^{いつ}息^{いき}を^をひ^ひく^くえ^えよ^よと^とも^もと^と
大^{だい}勢^{せい}が^がま^まさ^さり^りど^ど中^{ちゆう}に^に急^{きゆう}脚^{きゃく}子^しと^とん^んえ^えて^てま^まる^る
く^くと^とい^いひ^ひ色^{しき}色^{しき}黒^{くわく}と^とあ^あら^らり^り顔^{かほ}ま^ま一^{いつ}文^{ぶん}字^じふ
行^{ぎやう}る^るを^を撰^{せん}卒^{そつ}た^た引^ひと^と矢^や我^がに^に理^りる^るに

何處へ遊るととめられ遊とはおろり亦くも
茶研城に隠れりき不動明王を見よぬりと
市川流れて白眼付け、秋卒たうらうと終に
えぬ不動白後光の火燭うごさぬ放陸中
念ぬ大黒回赤ん遠しよのうらむし不動明
王おろりつきおれが急足ふりし獅子の台
儀草の銀音履くう鳴よあこされ燭午の
花おの本店くかくして心付く上り階ふ
近とよとと祭ふと地獄へ飛脚がやり度が氣
のぬい時をぬ守内でも人少階下ぬる久

の年月はらりぬりありしむかごとくきくるとい
合少と雷や風の神ふぬる筋の小まも氣の
毒そらの小窓をたけてくれぬぬん不
及安うけなふ後合を割叱迦矜羯羅不
いかに年、地獄でもおれのゆが物急るぬ
砂の藪藪のくやぐるぬ志やことほし不自
の捷ふ三途川をふりぬり先祖代く物傳
し芥中の大燭をぬきふしや大事の後
光様は年連はいくひで不動をん見遠し
念ぬるぬ燭午のどやが志れぬ外をさ

とふ及ぶはくすりて色と並一と云は
いふの昔号、且安い伸ふ案をさす自
乃名是と云ふかの次升ふとるの玉ゆの
衣ふの川あれて流考志やとんうれは
これと他生の思んす快迷い子の端千
知らず子地口口と系証らんくと
一花系とて守り

根無子後編一之巻終

根無子後編二之巻

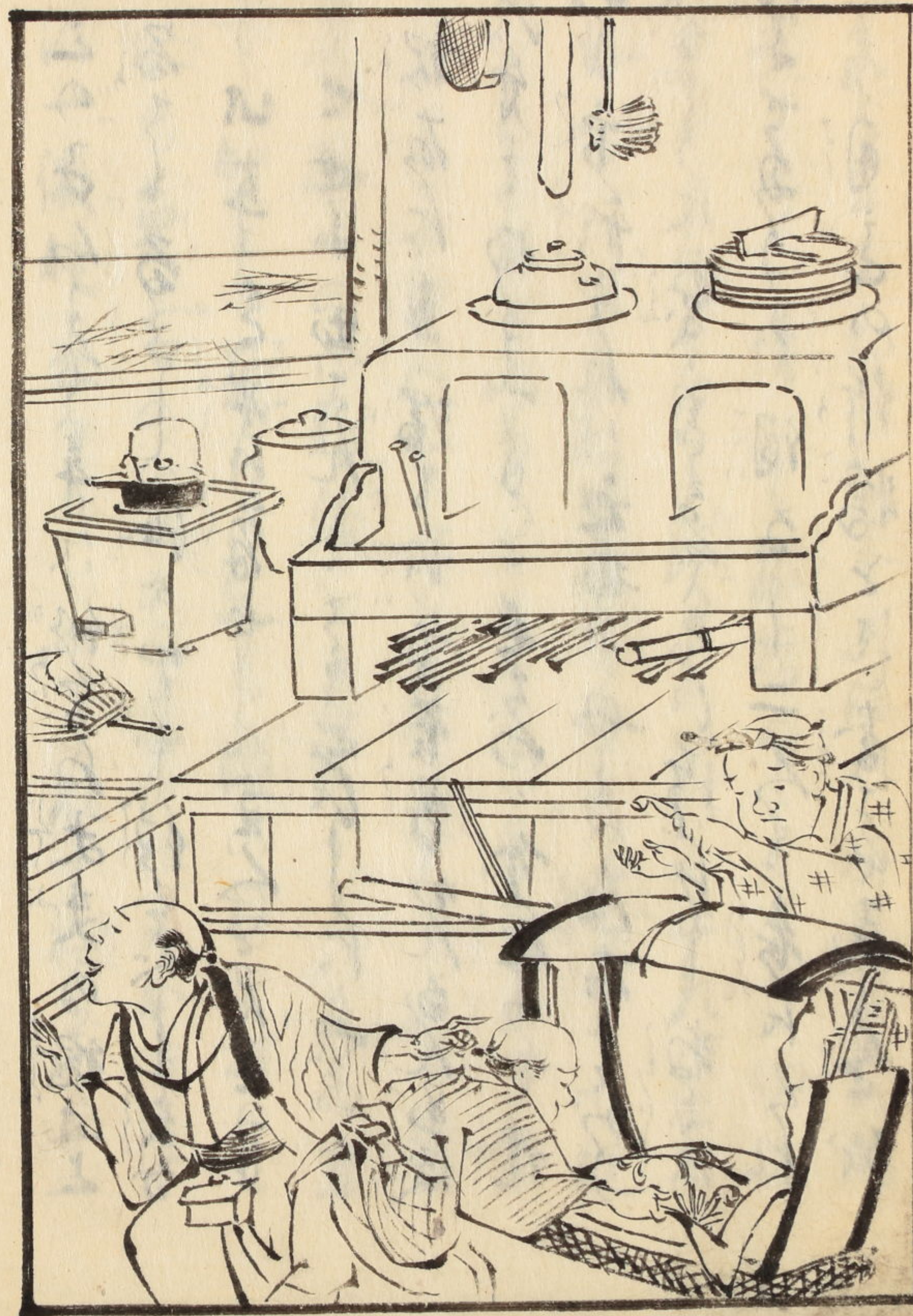
そと造化の如くあるまふ思を
田荒化して鶴となり雀水の
奴愛して付尚となり婦化して
解をゆて流のどく海冬草
大戸沼と云れり酒風後と
おたふされて飄客と
あき張華も持物の看板を
お威志の底をたむき
者あり此者の変化定るる

うゝぬば 顔と顔と 油と命と ことよの 魂も出され
とふらに とうてい 死なずとも ねむら ぞうを して
身代て 後方の 傳令とも 行くの 人參ぞも 潤く
んるが 入書生る うれい つかも 害で いるが 死に じ
か 信ふまか つか 重く 出来 つか 何時ぞも 活返さす
自由なる の 心子 忠の 孝なり と せま せま つか つか
夕かか 兼も 痛む 兼も 兼も 六里の たて 面一
兼も 兼も 兼も 兼も 兼も 兼も 兼も 兼も 兼も 兼も
と 兼も 兼も 兼も 兼も 兼も 兼も 兼も 兼も 兼も 兼も
と 兼も 兼も 兼も 兼も 兼も 兼も 兼も 兼も 兼も 兼も
と 兼も 兼も 兼も 兼も 兼も 兼も 兼も 兼も 兼も 兼も

のゆゑ 人知らぬ 子に 一と ぬと ぬと ぬと ぬと
バ 飛つて 飛つて 飛つて 飛つて 飛つて 飛つて 飛つて 飛つて
色と 色と 色と 色と 色と 色と 色と 色と 色と 色と
四世 法傳が あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
る 武士の 浪人 いく いく いく いく いく いく いく いく いく いく
能く 能く 能く 能く 能く 能く 能く 能く 能く 能く
る 将と 兼も 兼も 兼も 兼も 兼も 兼も 兼も 兼も 兼も 兼も
子の 肉を 食らる 同あ 先祖 へ 對して 言は
る 大 猫にも あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
死とも け 後 兼も 兼も 兼も 兼も 兼も 兼も 兼も 兼も 兼も 兼も

乳文もろー成るをもとめられ所が父の何
とすうりし侍りぬ指指ぬさうりし切後
とスうりしもさる路もいだし止れば祖母
もりあハ叶ふねどもせしむれ送らうて短
乳とさるるもさうりしもさるるが望んまかせん
取らんたむむれどぞかき生を捨る事常祖母
るや父上の心難後とんんよりハあせく
たてかえら強けバ父も後の目を押のこ
ひ氷の象言の菊を存りあもかとうりまじ
日は一徹短も思うりと呵られ一絶あて十二

や之の子ゆそ一年に似合ぬ丈夫の短け上
とるてもるし世がやう何とて一玄を
かゝい年と昔の音せハ主人とんまな
公とせせお出さんとこそあひ一にふがいな
さ親あに年短もりで昔方かんあんあ便
の自分とあまふもさるるが介抱あて禮
あま官形とれば祖母と母といたをまが
便をさるるあまふもさるるが介抱あて禮
胸ふせあまふもさるるが介抱あて禮
みぐもこの竹筒とけし書させ民を



後一へ海を花が青子と成栢迄の一字を貫
し能号と栢車と名寄り村上彦四郎の若
事より次第く評判し上方よりも栢
れくありと反之内は初の名をを思
りしと雷翁と改名し再江戸へありく
よるは益見負の人ありは人の河も
家ハは合悪してか終身とありた水に形
ハ武門へありがくちんる若の武士
と忘んやとま志古の集家劇臺がめし
き紙船一ありあり西遊にて任侠とふの

みぬとむし一弱き人ありれども強き者
より一寸も引だほを能角力とよま又養の
よるん世よふあぶ者もほしこれバ後く
評判くありねえ多し中にあつて賣あ
かん平総角の助六あんど数いあき大入
て世との評判樂庵のよるなり一取し女
中の具負つてく雷翁くしと中一立世し
園扇振舞三舞の中へ雷の字を付くを
る衆も町も路あり雷においぬもは霞
ハからゆがり振まれとがふも多かりきなふ

又之車 師坂東彦と申新水といふ者も
先の彦と云ふ者ありて新水と菊松と
うん 唯り師が父新水の泉下のあつてよ
る葉松又のあつてはて二代の彦と云ふ
にりえ身父彦と申すれ竹の依人の
里の彦れめて是も武士の伴ありしが故
るて後世と成る者も或るを云ふ一実
の實といふは因りて其の上のよとのそや
これあつて賦のあつて一と云ふは清く役
者も一と云ふは新水と云ふに云ふ子る記

申すれ一りり人のあつてはて、陽田川の
新水と云ふれ通水とて新出せし子
一即後の新水とて實や云んが六卯の中
より新水と云ふ一由りたりや新水あり候
より新水と云ふ一由りたりや新水あり候
俗男女心をとりし扇牙板と云ふ新水
白いしと云ふは新水と云ふは新水と云ふ
思ひ子の時一ありて義之が墨蹟定家の
色紙にもまゝありて父の墨蹟と云ふは
の新水に初よりと云ふ師の名代とて

夢の醒るかよふも夜のはげしき父も母も
最良の令孫も多うおそれいふ事屋も
あはれむくは時にいれも遣ふ後さうあ
と即て家屋ぐはねはるやうと生憎ふ
て流石昔のあづさう引さる女中さん
厚の便をおく玉の結の隠さんか
目の言を思過るるもあつても多うし
自然と柳下あがはしきさう
る怪我あもさう共はれはしと恨れ
ま守りの思ふ事大人君子も恥ぬ
一切

新水孤とて親類連もあつた尾と柳幸
と親類又い柏車が男氣と見込兄弟分の
約をさう雲とあつたんとあつたし
後の後も交り流すば実の兄弟を
いさるるさうの約束や戌の秋より
花ハ何とさう一故出押して勤へ
次第に言ふ悪りた言の二月より
と行く事生一りり成親事も日く
病あつた事もさういふれさう
んくはさうあつた病の
病は是れの方

平治をとり入る魂をまよふと物
くく勅定あれが教法の泪をゆぐ宗帝
王居丈高うめて毎日毎水清ても重云
耳に送るの指はうりうり心も存し三子
世界のま中ふま日本といふ層といひ天
竺阿婆陀をいふあうく教方のあうり
くとも留されくの司りてまを治め民を教
万國を平を樂しと留し一人の徳ふれり
と古唐土あうく是を銀といふまをれ民を
けりま多く是を女の腰の細まをまけは宮

女小唄死多うりし主の好下必清ふあ
し君ハ世界の想目あうりてまを治め民を
のまをを正しとふ大切のあをを以て種子
れ小法かれ二十神帝の授業りのまを地獄
神通電一のあうり沙法の限りのまを
あ痛ても起てもあをのまを一穴の狐とあうり
教法をを唱あうりまを及りのあをを
あうり教法古師も唐土に入定りまを
あまをた教あがやあうりて勅ハ石羊石輪
て人をあやか一古河のああでまをたんとあ

る一獨噴毒と然一了世とうひの族も後
又教法のあな好はま人の一癖とてたを害と
ふふふとくくくくくく七癖とて後あり王
脩が馬癖和崎の成癖杜頼が左傳慈徳の偽飲
盛親信那の羊魁宗紙法所の弊を垂せし
も皆人々の癖をし志る者にして癖大なる
者い癖のありそくかされ志ちありてましくの
癖ある者何を癖のなる志公を棄れんや古所
のあなを垂せしるは一より癖二より糟穢も後人
みつるハ八珍をわくくくくく末世の坊色男色に

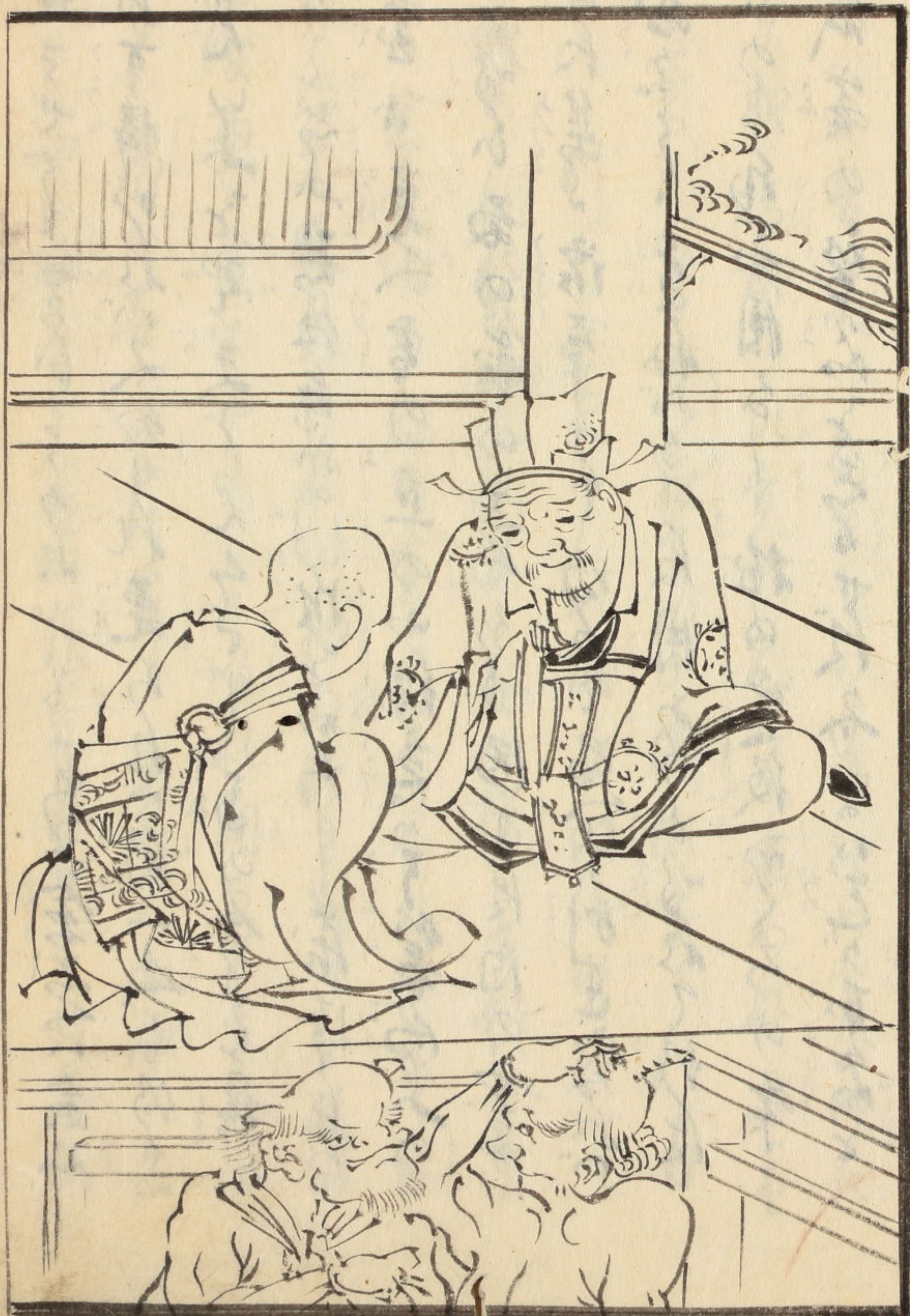
てふと海せむれ女の言とすぬれ一うんとを
とある後志のんを字を術の業の害ありと
不うあ〜んと詞を移り云返せ初は王
み出情悔まの洞面ふ一志一坊もいたしん
が女色をい〜めら俗人の男色をぬ半をい
ままゆど大も只今より後方ぐるを志ひ
切是より三谷通ひとあ糾去自と云つあり
乃後志一人の目んいりあまの信仕らんそれ
郭面一の風流るる宿の出入り人目と忍び
お業のい〜ぬに我身と竊じ或は兎や或は船

黄帝車と製とれを口々の懐き紫のハ出
ど梳束道徳を争つた格牙の子に心付ん
末世のまじり一は世の如き海のものに格の
自保能るも如て雲ふ入されに村を去り如て
空を志のぐも鶴入舟うろく人きく動け
ばごもは徳まれば志づまる游りて格杭をく
目かくハ堂とま一火籠およぐもは吸から
懐と行く声ハす一はは車の人目に宿く在
の海着格の味と履履と志のひで高く首尾
のねは波をくぐりて常ふ竹所の後十又字ふる

約形の半斛ふん後とそまの自とつとを
さめ息をさぐる程も一唐徳志乳山三國の
高居恨の一とあに配けバ洲の上の草心
けふ振くた戸格り一ととも通る人
ぐも人多く海のあ富多一とともあみ
あねバ入あみ一魚方格中を照るは格格の尖
ととふ小味ど屋格の江岸をとも白其格の
泉泉とけぬく合るも一男ハ女帝を親ど
とども時りく人ハ花ぬが換くと懐り草ま
とあせりハ人解文まめと月候くと照るハ

江戸町京町を後にして各々在二町より
さみ河亦その中にさき海まで獨南一町よ
よ家子丁所の名をさきは傳へて
風を多く身に付着海で終の音す一日言て
後格子帳ふたは位を定め衣裳は新古を
さうの伸縮もふさぎし二程地ふ言ささみは
後うぶふさぎし何半とうり地さうの
奇とさふさぎししこの町人新古たと付い
よ、老節りねにさきあり醫人あり先生あり
て聖妻河さきば思ふ去ありさうさきを始

の氣僧ハサキ一傳り若の紋取中ハ一水の雲
と生ト編笠一斤の山紙画く種々の出立さ
くの風俗波のどく素雲のめく集り人の
心各異ハお好亦一般あり目取に惚れハ
口えにるがみ鼻節りアム込バ厭ハお込葉
と苗と燕石や玉と何ささき何と取ハ
さん初會のさきおさき古く強えさぬも
いものへ作法を崩さる位をさきさき
咄ど傳れささきの柏子り葉さりと
の企及ささき料理出床ささき



は供ませども世にいそりねども母の念に念と
それ可憐のれは又がこれ連あねはけ一人もゆ
見えしよと世まといえどしるの命を粹
ありともふ悲仕舞ハ門帷をかろ一居侍けり
深室に笑く雪の旦の少端をハう装向の
人と習いぬの歌のこつあり酒よれ肉の女命
追々大集の流をハくゆりと心と別世ふるは
河あうごくまねはあうぬ用あうとゆれては
またのこゆふ用る一松の定役やくろの奈
若紙客の習ふ子とるせれみよいこがねを

あらし昔と吹一ゆ来をわろけに誓ひ佛に
けり或は指或ハ此実と見える虚あねの虚を
出さ実もあうあ飛鳥川の測術定るげ月
柔のく川くふもあねハ捕まゆ依勢あまう
羽織さこれ髪切れ男と女の掃をちねば女
男の志気地りゆも実け里のあういせあうお
日の約束取具の装初袖留けさ山一舟法の
後後あを貰てやりとゆれ角うくそ牛と
いろ巻ハ森の字に定り豆腐ハ山屋よお
う一袖の梅をせんぬい漬菜昆布を甘家梅

群玉殿の河漏りみそり一室中此月を竹村
よ仕出ると小賞の後漢茶碗の煮豆膏の文蛤
束明の梅唐世よ華ろく知ふれを一柱の舞
多々中にも大忌舞のいさ海一焼炭の花
くく二日七種花菜こ初年涅槃事りさ
り上巳薩伝衣文瑞年七夕孟茶盆舎と節
重陽をむと穠いのこ候つと後茶市梅乃
凡俗月見の張向吾そ一菓とを以一寸の
茶花一ふりぬをのべ白髪急思き一愛び
世に習ふとぐと案あんやわら凡俗を知らば

してあなをむき一う少事ハ夏の虫氷とるん
乞食の女房掃立の候を喰らるに即一サ
近き張水んと席を叩て流らぬ

根々草後編二之巻終

根無草後編四之卷

初江王れ無ズ子ザリ端王を初ハりて一夜トもレん
跨ハり入河ニと出ル者もほし主時ト大昨ト荒ルと
して曰ク純魚ノ舞ヲ具スるヲをスるハば夢の
虫カるハらハば女色ヲ 淫カるハば夢を夢男
又ノ妻トとシて知れバ男女の交ハ隠
陽自然ノ乃理ふハて大輪ノ根元るハバ
いまとシて世者此乃子とシて家一族も
末世の事とシてかれば妻と男女の交を切棄ス
りて根元と名付ル人ノ心を薄クしテ夢を傾ス

けふとわらひてさびしき
男色の情を以てさびしき
わて情をさびしき
の上品うらはは劇陽の地をさびしき
此情風うらて人を初らるの思とさびしき
若を初め許す教へて思を忘れ
病て礼世の情をさびしき
まの理を知り思をさびしき
さ思如子も友人の姓名をさびしき
の情いさうし柳花長旅のさびしき

安中村新市村新市村
あふ入と事さびしき
根えさびしき
てさびしき
初清初移り古思さびしき
ささびしき
思を忘れ一陽身後思は地さびしき
ささびしき
ささびしき
ささびしき
ささびしき

老若信依男女物さへは魂花を定ふるや
振目とやげ衣星の北辰よ昔は河水の
海に船とふしりし上極交り極交り極
交り新格子場木の音息も物と求り榮
屋の云込る後を競ふ毛體の糸糸衣袋
の花屏障の人の依のどくきく音息
の透るる帷のどくたり極交り極交り極交り
切落し追込るんとも小窓下好お極交り
極交り極交り極交り極交り極交り極交り
極交り極交り極交り極交り極交り極交り
極交り極交り極交り極交り極交り極交り

蜜柑糸菊酒肴を極交り極交り極交り
割込るる衣の極交り極交り極交り極交り
とこがけ袖と袖との糸糸糸糸糸糸糸糸
もら極交り極交り極交り極交り極交り極交り
了りかつさ出はるる糸糸糸糸糸糸糸糸
幕あけてより極交り極交り極交り極交り極交り
の極交り極交り極交り極交り極交り極交り
質を極交り極交り極交り極交り極交り極交り
糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸
はおし極交り極交り極交り極交り極交り極交り

一して百取に送作し刻印く致内際
茶尾のむしを送りて龍竹海峯西を毛尾に
振神地を拂ふ源の髪雪の脛小神さのび
ちたし世母の目を強し一足高志をち
りて人の胸を穿く道とにあり程に
う産れ音とりハ旭の昇るがごとく風情の
あけのほりしふ似たり小奇骨ありて
之結俗ろくば酒くらと奥閑し一て舞の
身がうねまのありしと梅橙ハ二葉あり香
し蛇ハ一寸ありてまを風とゆるらんら

火まハ一たをゆりハ八巻糸くハ会傍地に
どろんは野漢舞蔭法夢色中返了男ハ
女ハ獅子らよさうりちよ投壺の多敷春は夏
化蛇を蛇輪しすけ里長ハ狐ハ淫らあを
忘れんを忘しきさふさふさ乃ぶ降氣
急変の夏万化蛇の骨龍ハ入澄さのめ
あよ一或ハぬん或ハ別際あつそりし
空忘のちりし流るいゆるあいなやつらん意
気比あり拍子あり己を忘るの計策わく
末を契りの惣もるし一傾城を甘さく壺の

しき 半音に流るる水のしき 母さとのい味
そはさると意味の味を生じ 俗妓の實の怨
出候亭の實の怨より 本風 鳳凰 孔雀 雛鶴 所
を 梅の又半 なるふと 膝子女妓 町屋形
女ハ男端の更らうらに 及ぶんま 二丁町
の地より 移りたる 花の都れ 柳とあそ 柳橋
れ 敷るるを 搦む 浪花 けり 身 法 けり 一
より ありの ありと なる 子人の 中より 百人
と とも ぐる 百人より 又一人を あり 必代の 小偶
古今 幾ど 此の 藝花 四時と する たる 二月の

凡九月の 福流 中 の 筆 二 聖宗の 不 徳
小云と云や 四方が 仕 似 せの 伏 泉 あり け
る 徳の 孝子も 芥 叢を たく 福山の 河 編
虎 危の 葉子 家 橋 也 府が 他 店 雷 花 かに
麻子 候 有 小 流 の 日 小 流 なる かれて け
言の こと 是を ば 強 いて 明 々と 志 げ 元 氣を
川 之 積 葉を 敷 ぎ 不 志 延 年 の 葉 たる とも
い たり あり けり 結 ぶ けり ン や 彼 利 入 じ 俗 妓
實の 陰 庇の 傷 を 小 敷 せり 目 を 同 じ 結 ぶ
べし べか 俗 藝 花の 中 に 二 丁 町 柳 橋 一人



とありてつきののけらりどぎり
かゝる婦人五とらつこと白眼東夷南蛮水
状西戎四夷八世天地乾坤のにも同なりと
さ者のめどざらんや世病よて瘦れぬ
と海をが濠の船後天幸まうしの婦人度
鬼尾くつりを取あてともしるひとあつ西
下めのねえらるい色せんく侍くつら
目のぐ鼻のいれぬちよこぶいかりたて
おろがあぶの産卵の海舟すやをひ
いりていりるあくひつらとひりふおろけ

と番倉がぐまのく鳴の荒年ふうぬが海
用ふらりと花柳ちまのめんづら柳
投げぬバツレのがまをくあまをて取てはるけ
のけはんで六十五王みごんの鬼はぶやあを
ま踏らしししまくくま一夏えて番倉
と病の麻冷汗流くくうあさるる妻を
とどめ病あの人をねた介抱とねが柳ふ
西乳とあいつくろけりあをつぎ我長
病のはりれくままらうむともあさるる内
不心依るあをんくしては海の子あは

これぞ心しく我命の終るべき時なり 悔す
の廳へ至らば佛の告と覚えたりとる處
て知がかりし難難の世の中を悔う
べてるるより河原の唱声のまみくち
ぬるんぬる志づけ世の人の具負う難
世後よめりし思もあつて累んと返りて
口惜し二よハ通てより家といふで朽果る
とも悔とちり三人とみり父の名をよはが
せんともり一事もあつた地をぞよむらの障
りぞと後と終るおぼれは書や子供にさやう

上とあまの河もゆがれハ新水の力を付む病
を癒しぬと死らるるまを極るま一葉の
効佛神の力を頼みひつる心あつふ善哉
あれ聖の宮流るると神らめけてまうに
次の葉ハあまのまじり念はる力をとるれ
ばいと極しげふらるる何ういふんともが
けども古流りてあまを流るるをとり
て解世の一葉なり

終るる方ふし極樂

市川栢車と云終り四十に年を一終と
明和四年五月中の二日子のり別眠がどく
の勝経くく美の心地きてあ後あまの
終りの新目とつてくねわは身うりぬま
ふまふもあふまね野道の送くかかまひ
不承を善院示るれば石の常林と華て
蓮華院修行信士と書ふとて官の石は朽
せぬと豊原の人の後のあ朽ぬ杖はうりぬま

根毛草後編そのうに終

根毛草後編巻一又
系乃とたはたのむだうべと吉田の法作が
子の初形くうぬあ世世界くくく
日江健なりり市川栢車世とくねが
世との終りさ大くくうをを親妹の
差別をくあ情くみあを終きくけて
豊原の婦人るんだはあはれとて後後
あゆゆあん海り川あまきうりるばかり
ありふるどかこてども二途の川小川あ
ろく死の冥の戸団ねば及魂考れ燈

之帆ふまはり月と日の七日く の活吊ひ
法事新水が身中清り成るくおまら
ふい清り 憐れなるを父柘本、種之に
ひく 憐れなるを父柘本、種之に
かゝれば先祖の家名と傳せんとして又
の傳へし業と止させ頼むし人引く
て教訓 師の方もあるし 家 種之娘
るんども 而縁の方より高仕天長くを
教へばよく皆それく にく付りしれが
南山雲記れば小山を下ののりふて聖年

の妻の泣きより新水も首のくこめてとこ
無し記とも是えぬども 品何とるふんを
くは身より 形容 疲りくく 登汗 乾熱
瘰癧ふ葉し 臧し 心花 患 門 新 福 立 新
海の方よりくく ぬぐく 一 善 生 されし中
候気の祈にもんえんば 身も 而 抱 生
何ぞも 病も 是えぬば 後世の 業か ころ
うに 並り あり 何れも 佛 出 世 乃 在 悟
を 妙 法 蓮 華 經 一 名 け 法 華 の 八 神 八
八葉を 表し 一 曰 要 品 の 中 に 八 善 門 品

あんなぐりつるそれうりふちけけ
のゆまにや川の安舟漕ふ新の音ふ
新水の目をえし讀みけし經ふあり
一心祇名観世音菩薩即時觀其音聲
皆得解脱と念して信んぶる正を
うきとねに水晶太陽の光をよびあは
しゆく自然をくらしむるはくんと
まねとあひくして止まねに鬼津なるのち
かて鬼書に方に薫し喜樂の心ゆえ後
れハ新あり必呂漢のちいそまーやうよけ

又ねハ大空より満空乃観音鳥居
新れゆいこれへくと極まりハ新水
の心代り病の麻をまよぬ自然と病
苦もええべしして行ともうあはともふ
くさあふふ強ふり菩薩心自その心
かこあう卯のむの音にまがめをよりせ
まいそれ世の人乃口舌をみし我大悲
の力とるハ極れしあふ花咲との一筋
又見えしハ皆凡俗の迷うし生いなき
時をくし生し極る時節ふ極るは



いらぶく異夜の糸絡繰りなり 鳴呼付
らるが余らうり裁きしと名もなき柏車新
あ二年の肉もぬく人となり 劇場も何り
おどぬ風情もくいらぬのほのいふせん
と世とのいさみくもわりしが 楓も亦
お徳花登くもたぬ高松んせの入り
より美子の役者新なり 花を競ぶるを
争いも戸れれ大入世との評判 一時の權
とろりたりし 吉原町も建はくも日くり
驚冒いやまいて 英雄 若ふ十倍せり

くぶる新車 室前がらゆれし時 裸あり又
死付ももぐらあり 俗や汎や一寸先ハ
雲の敷く 鳴ぬ鳥のまはば 拾ぬえの合
そ恋しきかやれたけ 世よ多きと実ハ
右平の仲代の春車もあらや かの世ハ
俗ら民も 豊なら 君のあがらうりさ

根無草後編五之巻 大尾

跋

鶴が鳴吾妻のちと子お振袖の教乃和事
よりお守の振よ色い由縁あり江戸芝の
法印帽子いよんその多き香も深かか
やとららと此及れ暫くありて市川徳川の
お徳はるの原をくその末廣一十流をくま
人多けれ浪速の向と決まんつりて若所の
よ一ありをいよん花房町のありありおの
それよ湯島のりさかする物をこが一庵舎

の温泉のそとにひまき 例へば 髪を洗ひ。とも
とあひまくり 志守志のそとに 志守の
いさなりとそお持ち 情やいあるらうとさや
— 帝女のおかひい 久方のひさしひとあぞ
常衣の車よりうまれば 鈴の版を潤く
かゆくもを包丁の人料理の家へいそり
いらん山鳥の危れもく— 河漏語の僕
為をめで 年人の 産屋あり 合衆酒の 殊
別をのりて ちとこも 風俗の志とぶらりか

ぶさの意し 氣を扇て 古文をよく 鳥几の
よふまを曲て 篆隸をちと 文人書家と
いふて 志守志の 樂と 磬の如
をよそい 志のあふん 志とふる 志や 志や
時右平大 志の 志代の 志と志— 志と志
の— 志と志の 志の 志と志と 志と志と
いと 志と志の 志と志と 志と志と 志と志と
川の 志の 志と志と 志と志と 志と志と
志が 志と 志と 志と 志と 志と 志と

